第五講　演習問題(5)

次の文章は『増鏡』の序文である。よく読んで、後の問いに答えよ。

二月の中の五日は、[注①]鶴の林に薪[たきぎ]尽きにし日なれば、[注②]かの如来二伝の御かたみのむつましさに、嵯峨の清涼寺に詣でて、「常在[注③]霊鷲山」など、心の中にとなへて[1]拝み奉る。かたはらに、八十にもや余りぬらむと見ゆる尼ひとり、鳩の杖にかかりて参れり。とばかりありて、「たけく思ひたちつれど、いと腰痛くて堪へがたし。こよひはこの局にうちやすみ[a]なむ。坊へ行きてみあかしの事などいへ」とて、具したる若き女房の、つきづきしき程なるをば[2]返しぬめり。

「釈迦牟尼仏」とたびたび[3]申して、夕日の花やかにさし入りたるをうち見やりて、「あはれにも山の端近くかたぶきぬめる日影かな。我が身の上の心地こそすれ」とて、[4]寄りゐたる気色、何となくなまめかしく、心あらむかしと見ゆれば、近く寄りて、「いづくより詣で給へるぞ。ありつる人の帰り来ん程、[5]御伽せむはいかが」などいへば、「このあたり近く侍れど、年のつもりにや、いと遥けき心地し侍る。あはれに[b]なむ」といふ。「さても、いくつにかなり給ふらむ」と問へば、「いさ、よくも我ながら思ひ給へわかれぬ程に[c]なむ。百年にもこよなく余り侍りぬらむ。来し方行く先、ためしもありがたかりし

世のさわぎにも、この御寺ばかりつつがなくおはします。なほやんごとなき如来の御光なりかし」などいふも、古代にみやびかなり。年の程など聞くも、めづらしき心地して、かかる人こそ昔物語もすなれと、思ひ出でられて、まめやかに語らひつつ、「昔の事の聞かまほしきままに、年のつもりたらむ人［Ⅰ］と思ひ給ふるに、嬉しきわざかな。少しのたまはせよ。おのづから古き歌など書き置きたる物の片はし見るだに、その世にあへる心地すかし」といへば、すげみたる口うちほほゑみて、「[6]いかでか聞えむ。若かりし世に見聞き侍りし事は、ここらの年ごろに、［Ⅱ］夢ばかりだになくおぼほれて、何のわきまへか侍らむ」とはいひながら、けしうはあらず、[7]あへなむと思へるけしきなれば、いよいよいひはやして、「かの雲林院の菩提講に参りあへりし翁の詞をこそ、仮名の日本紀にはすめれ。またかの世継が孫とかいひし、つくも髪の物語も、人のもてあつかひぐさになれるは、御有様のやうなる人にこそありけめ。なほのたまへ」などすかせば、さは心得べかめれど、いよいよ口すげみがちにて、「そのかみは人の齢も高く、機も［Ⅲ］ば、それにしたがひて、魂も明らかにてや、しか聞えつくしけむ。あさましき身は、いたづらなる年のみつもれるばかりにて、昨日今日といふばかりの事だに、目も耳もおぼろになりにて侍れば、ましていとあやしきひがごとどもにこそは侍らめ。そもさやうに御覧じ集めけるふるごとどもはい

かにぞ」といふ。

「ただおろおろ見及びしものどもは、水鏡といふにや。神武天皇の御代より、いとあらかにしるせり。その次には大鏡。文徳のいにしへより、後一条の御門まで侍りしにや。また[8]世継とか四十帖の草子にて、延喜より堀河の先帝まですこしこまやかなる。またなにがしの大臣の書き給へると聞き侍りし今鏡に、後一条より高倉の院までありしなめり。まことや、いや世継は、隆信朝臣の、後鳥羽の院の御位の程までをしるしたるとぞ見え侍りし。その後の事[d]なむ、おぼつかなくなりにける。覚え給ふらむ所々までものたまへ。こよひは誰も御伽せん。かかる人にあひ奉れるも、しかるべき御契りあらむものぞ」と語らへば、「そのかみの事はいみじうたどたどしけれど、まことに事の続きを聞えざらんもおぼつかなかるべければ、たえだえに少し[e]なむ。ひがごとぞ多からんかし。そはさし直し給へ。いと［Ⅳ］わざにも侍るべきかな。かの古ごとどもには、なぞらへ給ふまじう[f]なむ」とて、

[9]おろかなる心や見えむます鏡古き姿にたちは及ばで

と、わななかし出でたるもにくからず、いと古代なり。「さらば、いまのたまはむ事をもまた書きしるして、かの昔の面影

にひとしからむとこそはおぼすめれ」といらへて、

今もまた昔をかけばます鏡ふりぬる代々の跡にかさねむ

注① 鶴の林に薪尽きにし日…釈迦が娑羅双樹の木の下で入滅し、荼毘(だび)にふされた日。
注② かの如来二伝の御かたみ…インドから中国、日本へと渡った、生身の釈迦の姿を写したとされる清涼寺の本尊。
注③ 霊鷲山…釈迦が説法をしたという中インド、マガダ国の山。

問一 傍線部1「拝み奉る」、2「返しぬめり」、3「申して」、4「寄りゐたる」、5「御伽せむ」のそれぞれの主語は誰か。その組み合わせとして正しいものを、次のア～オの中から一つ選べ。

ア　1 語り手　2 尼　3 尼　4 尼　5 語り手
イ　1 語り手　2 女房　3 女房　4 女房　5 尼
ウ　1 尼　2 女房　3 女房　4 尼　5 語り手
エ　1 尼　2 尼　3 女房　4 女房　5 語り手
オ　1 女房　2 女房　3 語り手　4 尼　5 女房

問二　傍線部a～fの「なむ」の中で、文法上ほかと異なるものを一つ選べ。

問三　空欄［Ｉ］に入る語として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選べ。

ア　かし　　イ　さへ　　ウ　ばや　　エ　もがな　　オ　にしがな

問四　傍線部6「いかでか聞えむ」の解釈として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選べ。

ア　なんとかしてお聞きしたいものです。
イ　どうやってお聞きすればいいでしょう。
ウ　どうしてそのようにお聞きになったのですか。
エ　どうしてお話し申し上げることができましょう。
オ　どうしてお話し申し上げられないことがありましょう。

問五　空欄 Ⅱ には「夢」の枕詞が入る。次のア〜オの中から一つ選べ。

ア　あしひきの　　イ　うつせみの　　ウ　ぬばたまの
エ　くさまくら　　オ　ちはやぶる

問六　傍線部7「あへなむと思へるけしきなれば」の解釈として最も適切なものを、次のア〜オの中から一つ選べ。

ア　面倒なことだと思っているようすなので
イ　話してもよかろうと思っているようすなので
ウ　会えてうれしいと喜んでいるようすなので
エ　無理に話しても仕方がないと思っているようすなので
オ　ずいぶん昔のことだと不安に思っているようすなので

問七　傍線部8「世継とか四十帖の草子」は一般には何と称されている作品か。その作品名を漢字（楷書）で記せ。

問八　空欄 Ⅲ には、形容詞「強し」に助動詞「けり」が接続した語句が入る。その二語を空欄 Ⅲ に入るように活用させて記せ。

問九　空欄 Ⅳ に入る語として最も適切なものを、次のア〜オの中から一つ選べ。

ア　うるさき
イ　たふとき
ウ　たへがたき
エ　めづらしき
オ　かたはらいたき

問十　傍線部９「おろかなる心や見えむます鏡古き姿にたちは及ばで」の歌の解釈として最も適切なものを、次のア〜オの中から一つ選べ。

ア　これから話す物語を聞けば、昔の人に及ばない今の人々の愚かな心がよく澄んだ鏡に映るように見えることでしょう。
イ　これから話す物語は古い物語には及びもつかないもので、よく澄んだ鏡にものが映るように私の愚かな心が見えてしまうことでしょう。
ウ　これから話す物語を聞けば、人がいかに愚かであるかがよく澄んだ鏡に映るように古い物語にも増してはっきりとわかることでしょう。
エ　これから話す物語は古い物語には及びもつかないものですが、昔に及ばない今の世の姿は、よく澄んだ鏡に映るようにはっきりとわかることでしょう。
オ　これから話す物語を聞けば、私の心が昔とはすっかり変わって愚かになってしまったことが、よく澄んだ鏡にものが映るようにはっきりとわかることでしょう。

第五講　演習問題(5)

〈模範解答〉

問一　ア　**問二**　a　**問三**　エ　**問四**　エ　**問五**　ウ　**問六**　イ

問七　栄華物語（栄花物語）　**問八**　強かりけれ　**問九**　オ　**問十**　イ

〈現代語訳〉

陰暦二月十五日は、釈迦が娑羅双樹の木の下で入滅し、荼毘にふされた日なので、あのインドから中国、日本へと渡った、生身の釈迦の姿を写したとされる清涼寺の本尊が慕わしくて、嵯峨の清涼寺に参詣して、「常在霊鷲山」などと、心の中で唱えて拝み申し上げる。側に、きっと八十歳も超えているだろうかと思われる尼が一人、鳩の杖にすがって参詣していた。しばらくして、「気丈に参詣を思い立って来たが、たいそう腰が痛くてがまんできない。今夜はこの（寺の）部屋に休もう。坊へ行っておいた明のことなどを言いなさい」と言って、連れていた若い女房で、（お供に）似つかわしい様子の女房を（僧坊の方へ）帰したようだ。

（その尼が）「釈迦牟尼仏」と何度も申し上げて、夕日がはなやかに差し込んできたのを眺めて、「あわれにも山の端近くに傾いたような日の光だなあ。我が身の上のような気持ちがする」と言って、寄りかかっている様子は、なんとなく優雅で、情趣がわかりそうな人だよと見えるので、（私は）近くに寄って、「どこからいらっしゃいましたか。先ほどの人が戻ってくる間、お話ししようと思いますが、いかがですか」などと言うと、（尼は）「このあたりの近くですが、年をとったからでしょうか、とても遠い気がします。情けないことです」と言う。（私が）「ところで、おいくつにおなりですか」と聞くと、「さあ、自分でもよくわからないほどなのです。百歳もずっと超しているでしょう。過去も将来も、類のないような世の動乱にも、このお寺だけは無事でいらっしゃいます。やはり尊い如来様のご威光だよね」などと言うのも、古風で上品である。年齢などを聞いても、珍しい気持ちがして、こういう人こそ昔の物語もするらしいと、ふと思い出されて、心をこめて話しながら、「昔のことが聞きたくて、

年をとった方がいたらいいなあと思っておりますので、嬉しいことだよ。少しお話しください。たまたま古い歌などの書き残したものの切れ端を見るのでさえ、その昔の世に会ったような気持ちがするのですよ」と言うと、歯が抜けてすぼまった口で微笑んで、「どうしてお話し申し上げることができましょう。若かった時に見聞きしましたことは、多くの月が経つうちに、夢ほどの記憶さえもぼんやりとして、何も覚えておりません」とは言いながら、まんざらでもない、話してもよかろうと思っているようすなので、いちだんとおだてて、「あの雲林院の菩提講に参り合わせた老人の言葉（＝『大鏡』）を、仮名で書いた日本書紀だとみなしているようです。また、あの世継の孫とかいった、白髪の老女の物語（＝『今鏡』）も、世の人の愛読するものとなっていますが、（そのお方も）あなたのようなご様子の方でしたでしょう。やはりお話しください」とおだてると、それは承知しているようだが、ますます口をすぼめがちにして、「昔は人の寿命も長く、気力も強かったので、それに従って、精神もはっきりとしていて、その（＝『大鏡』や『今鏡』）ようにきちんと話もできたのでしょうか。（私のように）つまらない身は、無駄な年齢ばかりが重なっただけで、昨日今日あたりのことでさえ、目も耳もはっきりしなくなっていますので、まして（昔のことなど）とてもいいかげんな間違いだらけでございましょう。それにしてもそのようにご覧になった古い本というものはどのようなものか」と言う。

「ただ、ざっと目を通しましたのは、『水鏡』というのでしょうか。神武天皇の御代から、たいそう書いてある。その次には『大鏡』。文徳天皇の昔から、後一条天皇までございましょうか。また『世継』（＝『栄華（栄花）物語』）とかいうのは四十帖の綴じ本で、醍醐天皇から堀河先帝まで少し細かい（内容です）。また某大臣が書きなさったと聞きました『今鏡』には、後一条天皇から高倉院まで書いてあったようだ。そうそう、『いや世継』（＝現存しない）は、隆信朝臣が、後鳥羽院のご在位の頃までを書き記したと思われました。その後のことが、はっきりしなくなった。覚えていらっしゃる所々でもお話しください。今夜は（ここにいる）誰もがお話相手をしましょう。このようなお方にお会い申し上げたのも、そうなるはずの前世の因縁でありましょう」と話すと、「その昔のことはたいそうはっきりしませんが、本当に事の続きを申し上げないのも気がかりでしょうから、きれぎれに少し（お話しします）。間違いが多いだろうよ。それはお直しください。とてもお聞き苦しいことでしょうよ。あれらの古い書物と、同列にはお考えにならないでください」と言って、

　おろかなる…＝これから話す物語は古い物語には及びもつかないので、よく澄んだ鏡にものが映るように私の愚かな心が見

えてしまうことでしょう。

と、声をふるわせて詠み上げたのも奥ゆかしく、まことに古風である。「それならば、これからおっしゃることもまた書き記して、あの昔の（大鏡の）姿と同じようになさろうとお思いですね」と答えて、

今もまた…＝今もまた昔のことを書き記すとよく澄んだ鏡にものが映るように、過ぎ去ってきた代々のことがはっきり映るから、これを『増鏡』と名付けて（歴史物語の）あとに重ねよう。